

11月の学習会の案内

平成27年11月24日

気が付けば年末が近づいてまいりました。先生方にはお忙しい中ご活躍のことと存じ上げます。本月も郵送でのご案内が遅くなってしまったことお詫びいたします。

各グループでの西日本集会へ向けての検討も終盤に入ってきたところかと思えます。引き続きになりますが、先生方のお力を集めて新しい年へ向けて、進んでいけたらと思えます。

今月の会は以下のようになっています。先生方の参加をお待ちしています。

日時	平成27年11月28日(土) 9:30~12:00
場所	岡山大学 教師教育開発センター東山ランチ 2階 授業研究室 TEL(086)272-0511 FAX(086)271-3455
連絡先	小出 真規(こいで まさき) TEL 090-5704-7339 m-koide@okayama-u.ac.jp (学校パソコン) m.koide.freewill@icloud.com (携帯メール) ※小出の携帯メールアドレスが変更になっています。
内容	西日本集会へ向けての教材研究および授業構想(グループごとに内容が異なります) 実践内容の検討
＜お知らせ＞	
※ <u>駐車場について</u> 東山ランチの駐車場をお使いください。	

10月の学習会の報告

今年度は、3つのグループ(学びのつながり・発達段階のつながり・学習者のつながり)に分かれて、教材研究を行っています。10月もそれぞれのグループで研究を進めました。

小川先生より

これまでこの会を中心に、文学ではおもしろみつけしてきた。おもしろみつけの力はある。でも、説明文はちがう。説明文へ入ってきたとき、とまどっている。子供が。

井原、新見の授業を見てきた。文学では、すごいな、臆病だ、変化しているな、という直観があって、そしてそれを確かめようかとなると、「すごい、変化をみつけよう」となる。子どものワークシートはというと、その「すごい」がワークシートへ直結する。文学のおもしろみつけが平易な活動になっている。ワークシートへの書き込みに困らない。すごいを感じた、変化を感じたが発言につながる。様子反応は授業の中で、出てきにくい。子どもの頭の構造は、豆太は臆病だな、豆太の描写から分かりますとくる。放っておいたら、そのレベルで終わる。描写表現をのこり10分でおさえる学習をすると、今度は二重構造。

わたしは、描写反応をしたら、様子反応で分析して気持ち反応へかえていく。様子反応、つながり反応は一回クッションがある。描写反応はやさしいが、様子反応は一段クッションが間に入る。

「天気を予想する」について。武田さんはどんなことを伝えてくれているのかな、天気を予想する、伝える、的中率、題名や問いの文から直観。それが決まったら、それを確かめようという直観が働く。どういいう直観を確かめようとしているかの押さえがいる。黒板の片隅に、子供の直観が書かれていないといけない。直観の中身が黒板にないといけない。前の時間に確かめたこと、どんな反応を使って確かめたの？数値表現などに着目して気づき反応しました、この言葉に着目することによって内容を確かめていっている、といったこと。つなぎ反応でいえば、つなぎ反応から何を確かめようとしているのかの確認、どんな反応を使ったのかの確認をていねいにしていく。「今日の学習場面は、的中率が100%にならない理由、これを確かめるけど、何反応があるかな？」気づき反応が使える、つなぎ反応（グラフなどと）、高次の子は、突発的と局地的をつなげば、わかるなど、そういった見通しがあると、つなぎ反応などがどんどん出てくるのではないかな。

井原の実践はそこが少し、弱かった。文学と説明文はちがう。説明文は二重構造になっている。その意識がめあてをもつまでに必要なのではないかな。その辺りを工夫すれば、わかりやすくなっていく。これからの説明文の授業に参考になれば。

磯野先生

このグループでは、大きな直観があって、それに対して1時間の授業のめあてということになると、もうひとつの直観になるのか、その部分をはっきりさせるものを作っていた方がいいのか。

小川先生

直観について話をしないといけない、という田中先生からの話がある。「天気を予想する」でいえば、直観は書き手の要旨を考えると、科学技術だけでなく、人間が体で感じるということが大切ですよ、となってくる。それを確かめようとしたら、文章の前の方で何もできない。そのレベルは前で書いていない。そういうことでいうと、要旨にいたるまでの過程が直観の中にあっているのではないかな。そうしないと前の場面が読めない。要旨＝直観のみだと。難しい。また、問いがある。天気だと三つ。それぞれの問いごとに検証する内容が決まってきて、それには、どんな反応が必要なのかな、というようにしていくと授業の設計がしやすい。ということを考えている。おもしろみつけは要旨だけへの反応では成立しにくいのではないかな。しぼりすぎると厳しのでは。問いがある文章については、そこは直観をもちやすいところになる。

磯野先生

高学年になると、おもしろみつけでいくのか、丸ごと読みがいいのか、いま話題になっている。

小川先生

まだ岡山県は場面ごとに分けたり、段落ごとに読んだりしているんですか、と言われる。京都や横浜の指導案を見ると、丸ごと読み。進んだところの自治体は丸ごと読みで授業が展開されている。できることなら、おもしろみつけと丸ごと読みの両方を西日本集会までに練っておかないといけない。丸ごと読みでいくなら、筆者はこれを伝えようとしている、もちろん過程をふみながらそこへ反応していくということ。

小野先生

高学年になれば、構造が複雑になっていく。逆に中学年までは構造が複雑ではないので、要旨を直観して読んでいけるということもあるのでは。

小川先生

文章全体の構造をとらえるのが四年生。丸ごと読みの導入を考えるとそこに区切りがある。高学年は複雑。鳥獣戯画は何回読んでもわからない。高学年のような複雑なものに耐えられるようにすると考えると、

中学年で丸ごと読みをしておく。突然、高学年で丸ごと読みをしてもアップアップ。種をまいておいて、高学年で咲かせるという発想がある。丸ごと読みというのは、おもしろ見つけで見つけた反応の活用。活用型学力の授業。最初からそれができるかという前提として、習得が必要。おもしろ反応を広げて体験することが種まき、それを3年生までにしておいて4年生から丸ごと読みをしていく。習得と活用。おもしろと丸ごとの関係はこの会ではそうとらえている。これは一つの考えなのですが、ぜひ、挑戦してみてください。めあてまでをこうしたら、ワークシートへの書き込みがこうなったよ。直観とめあての関係をこうしたら、こうなったよという実践が必要。この会でそれを出していただいて検証をしていきたい。今日は赤木先生にしめくりをお願いします。

グループ協議

●学びのつながりグループ（野崎先生）

近藤先生の「わたしはお姉さん」の授業構想を検討

大きく3つの話題

- ・どんな直観、どんな反応ができるかについて
気持ち反応「はりきっている」「やさしい」「なかよし」
会話文から気持ち反応ができる。
音読をどうするか ていねいに音読をしたい。
お姉ちゃんらしさについては、物語の前半は形式的であって、後半で本物のかりんちゃんのお姉ちゃんらしくなるという変化反応もできる。自分の経験から読む、語るということもしながらの気持ち反応ができるとそういうお姉ちゃんを読むということが出来る。
直観については、場面ごとにきって直観をもたせるということも話題になった。
- ・2次から3次へのつなぎについて
すみれちゃんシリーズを読む 会話文への反応への定着を図る
会話文に反応する、会話文をつなぐということで、丸ごと読みへの種まき
- ・様子反応について
この教材は会話文からの反応が多く、描写表現は少ないが、中学年へ向けてそれも大切にしたいということをお話した。

●育ちのつながりグループ（田岡先生）

- ・直観のもたせかた
高学年で筆者の伝え方をたしかめようとなっていくのなら、中学年でどうするのか。中学年でいろいろなものに反応しながら筆者を出していくということになるかなという話題になった。
- ・反応について
高学年では、筆者反応、気づき反応、つなぎ反応、中学年のもの加えて質が変化、深まる。同じつなぎ反応でも、その中身がちがう。高学年では、反応することで、中学年とは変わっていくととらえられるのではないかな。

●学習者のつながりグループ

五里霧中、暗中模索にやや陥っている。現在のところ、丸ごと読みということで考えている。1次で何をとらえてどんな読み方をしていけばいいのかとを考えた。内容には反応してきているが、工夫までに反応しづらい。どんなめあてになればいいのか。両方が一度に行くことができるようなめあてはない

のか。

4年の教材を振り返る0次をもつ、累積的なもので大事なことを確認して、探究的にあるためには、
どういう手法なのかな、小見出しを付けるということも話題に出た。反応についても考えていかなければ
いけない。

赤木先生より

小川先生の話がどういうことなんだろうということがずっと続いている。結局は、文学のときほど、説
明文は気持ちよく一人読み、直観の追究がしにくいので、説明文の場合は、「たんぼぼのすごいところ」と
いった場合はいいが、内容をとらえたあと、教師からの投げかけで後から扉を開けて、書き方の工夫に焦
点化の発問としてしていたのを、一人学びのところから、内容プラス書き方の工夫に反応していかないと
主体的な読み手になっていかない。今は案を検討中。考えることが、説明文の読み方を考える。事例と意
見を表にまとめて終われば OK。黒刷りの指導書では、そうなっているが、本当は、どんな反応を使って
どんなことを読んだと言える読み手となるようにしていかないといけないと思われる。

すごい指導方法があるということではないが、子供が内容だけでなく、筆者の工夫レベルまで読める
ようにならないかなと考えていくということが大切

倉敷南小で「私はお姉さん」のシリーズ読書の実践発表がある。教科書の「私はお姉さん」は書下ろし。
他のシリーズは長い。長い中から、見つけていくということ自体が大切で、本当の生活読書になっていく。

文責 小出
間違い等ありましたら、お知らせください。